

救急外来から要請があった。強い腹痛の患者さんの診察。聞けば、かなり前から腹痛があり、タバコで痛みをまぎらしていたという。もともと胃潰瘍があったと想定する。さらに喫煙が追い打ちになった可能性があった。胃潰瘍が深く掘れて、胃に穴が開いた状態だ。腹膜炎の所見だ。潰瘍は、内服薬が進歩して大事に至ることは少なくなつたが、今でも、穿孔(せんこう)・出血・狭窄(きょうさく)の3点は、われわれ外科医の出番となる。痛みて七転八倒するご主人を前にご夫人がオロオロするのも当然だ。「先生、主人は死ぬんでしょか」。私は答える。「そうならないように、全力を尽くします」。「先生、この人、来月定年なんです。会社の皆さんが記念して伊豆旅行を予約してくれているんです」

医療に絶対はない。強い使命感を持って臨んでも、結果が悪ければ、責を問われる場合もある。しかし、完全な

民報 サロン

意気と士気のもとに

柿沼 雄二



る確証はなくても、頼りがいや頼もしさが欲しい場面はある。これまでも避けて通れぬ局面に、高い価値観と熱い責任感の連帯なくして難局を打開できぬことを信頼できる外科の同胞たちと何度も共有してきた。

所見は、術前の診断の通り、胃潰瘍穿孔による腹膜炎であった。テレビの

ドラマでは術後すぐに「成功しました」と言っている。油断はできず、十分な術後管理は必要だが、時を逸せず、その時に全ての知識と技術を駆使して、やれることは確実に完遂した。こういう場面のために外科医になったと実感する。ご夫人が感泣する。そして、会社の方に電話している声が聞こえた。

心筋梗塞で命拾いしながら喫煙をやめられず、ご夫人から「私を未亡人にするつもり？」と言われた人もいた。後年、喫煙をしない、ご夫人の方だけが肺がんになった。その時も手術が成功して喜ばれたが、夫人が病気になるってやっと目が覚めた例だった。

これらの事案のように、事なきを得たものは多いが、やはり、もっと前に胃カメラの検査を受けていれば、ここまでの事態には至らなかつたし、喫煙も他者への健康被害を知られば自重できたはずだ。よって、医師冥利(みょうり)がある一方で、予防や啓発こそ重んじる。世に忌まわしい不条理はあって、避けがたい悲哀もあるが、総身に知恵を巡らせれば、不遇は遠ざけられる。そのためにも健診やドックで早期発見や早期治療につなげるのは重要。充実した検査機器や治療機器は今後、ますます必要性を増す。(郡山市赤木町、総合南東北病院医師)